



我が道は“電気”にあり！ 「無形の財産」を遺した 厳格・公平の経営者

かみ うち ごんじゅうろう
神内 権重郎 (1903～1969年)



株式会社 神内電機製作所

本社所在地：大阪府大阪市淀川区田川2-5-31 従業員数：90名 資本金：9,700万円
創業：1927(昭和2)年9月2日
事業内容：ホイスト・ホイストクレーン・搬送システム等の製造販売およびメンテナンス

割れたガラスのそばで…

「バリン!と音を立てて、小学校の窓ガラスが割れた。そばで相撲を取っていた二人の男子が教師にどやされる。「お前らはまた何をやっとなのや!」。二人のうち、痩せっぽちの少年が教師の持つ竹鞭で引叩かれた。しかし、もう一人の体格のいい少年には御咎めはない。そんな状況を遠巻きに見物していた神内権重郎は、鋭い眼差しで教師を睨み付けていた。教師はいつも村の実力者や金持ちの子には遠慮して何をしてもしやらないが、貧乏人の子にはちょっとしたことでも容赦しなかった。『これじゃ俺たち貧乏人の子には、あまりに不公平や…』。我慢が限界にきた権重郎は、教師にガラスが割れた原因は金持ちの子が負けてよろめいたせいだと訴えた。しかし、「相手がまともに立てんようになるほど強く投げ飛ばした方が悪い!」と取り付く島もない。『なぜ生まれた家の違いだけで、これほど納得のいかない想いをせねばならんのか』。

1903(明治36)年、神内権重郎は京都府綾部市の農家に生まれた。かつて神内家は多くの田畑を有していたが、父・新左衛門が酒浸りとなってから、その多くが人手に渡り、生活は母・はなの野良仕事で何とか食いつなぐ苦しい状態だった。その後、心労がたたったこともあり、母は権重郎が12歳の時に他界。それでも父は生活を改めることなく、一家の生活は権重郎の野良仕事や近所の手伝いで稼いだ金に頼るしかなかった。農繁期ともなれば、まともに学校に行くこともできず、つらい生活が続ける権重郎だったが、そんな環境に腐ることなく一家の生活を支え続けた。



権重郎の生家

地元である綾部は古くから蚕都として栄え、繊維産業が発展した。

艱難辛苦の日々を乗り越えて

転機となったのは、それから6年後、製糸会社に勤める親戚からの就職先の紹介であった。1921(大正10)年当時、日本は不景気の真っ只中にあり、権重郎も就職先を見つけられず苦慮していた。そんな折に、親戚から紹介された製糸工場でのボイラー係の仕事は、灼熱の工場内で朝5時からひたすらボイラーに石炭をくべるきつい作業だったが、生活を変えたいと常々考えていた権重郎は、これに二つ返事で飛びついた。

製糸会社のボイラーマンとして社会人のスタートを切った権重郎は、持ち前の負けん気で誰よりも懸命に業務にあたった。それまでの鬱屈した生活や気分を吹き飛ばすような働きぶりは目を見張るものがあり、1年後には給料が倍増するなど、周囲の評価も非常に高まっていった。

電気との出会いと旅立ち

綾部の町によりやく電気が通ったのは1920(大正9)年頃で、それも一般家庭や役所関係が優先であったことから、企業や工場ではまだボイラーによる自家発電が主流だった。権重郎は発電機や配線に故障があった際の修理も任せられ、何の知識もないところから独学で電気の勉強を始めた。やがて、日進月歩に発展していく電気技術に魅せられた権重郎は、今後ますます可能性の広がっていく電気業界で働くことを夢見るようになっていった。しかし、当時、綾部には権重郎の夢を実現しうる企業はなく、自然な流れとして大都会・大阪へ飛び出して電気の仕事をしように考えるようになった。

「何を考えとるんや!そんなもん許されんぞ!」。父から返ってきたのは、猛烈な反対の言葉だった。しかし、酒浸りの父を尻目に、12歳から20歳まで経済的に一家を支えてきた権重郎は我慢の限界だった。

父の説得を諦めて、大阪へ旅立つ決意を固めた権重郎は、次に勤務先の社長へ退職の意志を伝えた。社長は思いとどまるよう説得したが、決意が固いことを知るとあっさりと諦めて、逆に権重郎を励ました。「神内、大阪でもがんばれよ。でも、うまくいなくても気にせんでええ。いつでも大手を振って、ここへ帰ってこい」。初めて自分の背中を押してくれる人に出会った権重郎は、目頭を熱くさせながら社長に礼を言い、大阪へ向かう汽車に飛び乗った。車窓の彼方へ飛び去っていく綾部の美しい田園風景や由良川の澄んだ流れも、権重郎の心をとらえることはなかった。「もう絶対にこの綾部には戻らん!必ず成功してやる!」。眼下の懐かしい風景が食い込む余地がないほど、権重郎の胸は電気と大阪への夢と希望で大きく膨れ上がっていた。

学ぶ心は育つ場所を選ばない

大阪に降り立った権重郎は綾部時代のツテを頼りに電気関係の工場に就職、同時に夜学にも通い始め電気関係の知識を習得していった。しかし、その前に立ち上がったのは一枚の赤紙、兵役への召集令状だった。はじめは落胆を隠しきれなかった権重郎だが、配属された“電信隊”の活動は電信柱を立てて電線を張る架線作業や無線機を使った研究といったものが中心で、いざ入隊してみると、机の上だけでは学ぶことのできない“電気の最前線”での活動が権重郎にとっては非常におもしろかった。訓練を通して電気・電信技術を身に付けることができたのは、その後の権重郎の人生において非常に役立つこととなる。満期除隊となった権重郎は、大阪に戻り会社に復職すると、再び夜学にも通い始め、さらなる研鑽に努めていった。

1926(大正15)年、24歳になった権重郎は兵役時代に知り合った女性と結婚することとなった。通常であれば幸せな新婚生活となるべきところだが、戦争特需の反動からくる不景気で会社が経営難に陥り、生活はどん底の状態となってしまった。そんな中で権重郎は会社の残務処理に追われ、なかなか次の一步を踏み出せずにいた。



1936(昭和11)年、権重郎出征時の様子

「あんた、社長やらへんか？」

そんなある日、会社の債権者たちが集まって権重郎のところへやってきた。何事かと身構える権重郎に対して、債権者たちは唐突に「神内はん、あんた社長やらへんか」と迫った。呆気にとられ、理解の追いつかない権重郎を置いて話は続く。「みんな、あんたが誠実な人やと知っとる。あんたが会社を経営していくんなら、破産手続きを控えてもええ。引き受けてみいへんか」。得体の知れぬ不安はあったものの、電気産業がこれから発展していくと確信を持っていた権重郎の心は既に決まっていた。

「私のような者でよかったら、会社を引き受けさせていただきます」。キッパリと言いつつ放った権重郎に、債権者たちはみな「神内はんなら安心や」、「よく決断してくれた」と口々に安堵の言葉を漏らした。権重郎は新たに借家を借り受けて、その1階を作業所に改装し、妻が内職で稼いでくれた資金と自身のわずかばかりの給与を元手に「神内電気工業所」を立ち上げることとなった。1927(昭和2)年、神内権重郎25歳の時であった。

神内電気工業所の最初の仕事は和服用の電気アイロンの製造だった。売れ行きはそれほど芳しくなく、しばらくはどん底の生活が続いた。それでも実直で仕事の約束を破らない権重郎は、仕事仲間からの信頼が厚く、着実に事業を伸ばしていった。

独立から3年経った頃、相変わらず世間是不景気が続いてきたが、神内電気は様々な製品を手がけるようになり、4~5人の少年工を雇うまでになっていた。彼らと権重郎夫婦は家族的な関係性でつながっており、「人あつての事業、従業員あつての会社やな」と、自然と考えるようになった権重郎は、深刻化していく不況の中にあっても従業員のことを第一に考え、“親方”としてあるべき姿を示し、公私に渡って彼らの世話を焼いてやった。

1936(昭和11)年、世間がベルリン・オリンピックに沸く頃、権重郎のもとに再び赤紙が届いた。だが、今回の召集は前回とは訳が違う。当時、日本は日中戦争の最中にあり、この時点での入隊とは即ち戦闘の最前線への出兵を意味していた。事業が軌道に乗り、従業員たちも力をつけてきたことから、会社のさらなる拡大を目指そうと考えていた矢先のことだった。「俺がいなくて工場は回るだろうか。もし俺が生きて帰れなかったら、妻と子供たちは…」。次々と溢れてくる不安に押しつぶされそうになった権重郎は、従業員たちの前でこのように問いかけた。「私に赤紙が届いた。生きて還って来られないかも知れん。

ついては、この工場の今後について閉鎖も含めて考えたい。みな意見を聞かせてくれ」。ざわめきたつ従業員たちだったが、その中からハツラツとした声が響いた。「社長！我々に任せてください！」、「必ずこの工場を守り抜いてみせます！」。従業員たちから放たれる熱い想いを聞いた権重郎は、自分が過度に気弱になっていたことに気付いた。「わかった。君たちがそれほど工場のことを考えてくれていて嬉しい。私がない間、安心して任せよう」。

程なくして権重郎は伏見の部隊に入隊し、満州への派遣されることとなった。留守中は全従業員が団結し、何とか持ちこたえようと奮闘した。幸運なことに、軍から「近代戦に不可欠な軍需品を供給しうる知識と技術を有する者」というお墨付きを得た権重郎は、出兵前に軍から除隊許可を与えられ、入隊から半年ほどで大阪へ戻ることを許された。大阪駅では家族と全従業員が権重郎を涙で出迎え、また一緒に働けることを喜んだ。

とはいえ、日本国内の状況は悪化の一途を辿った。神内電気も軍の要請により、武器の部品開発を余儀なくされ、毎日夜中まで作業に追われることとなる。そんな出口の見えない閉塞感に、従業員たちも権重郎自身も疲労の色が濃くなっていた1945（昭和20）年8月15日、玉音放送とともに、ついに戦争が終わった。

無形の財産を残すため

終 戦後、神内電気は2ヶ月の空白期間を置いて工場を再開させた。しかし、当時はあらゆるものが不足した状況だった。特に食糧難がひどく、農家も自分たちの食糧確保のために米を出し渋り、市場価格はどんどん高騰していた。そこで権重郎は、逆に農家の必需品である農耕用モーターを生産することに目を付けた。思惑は当たり、農家の人々が米を持って続々と工場を訪れ「米とモーターを交換してくれませんか」と頼み込んできた。これにより、従業員たちは食糧に苦慮することなく、戦後すぐの時期にも精力的に生産を続けていくことができた。その後、状況が落ち着くにつれ、その他様々な製品へも手を広げつつ、神内電気は業績を回復・拡大させていった。

1951（昭和26）年6月、権重郎は、「株式会社神内電機製作所」と組織を変更し初代社長に就任した。名実ともに企業の社長となった権重郎だったが、そこにおごった気持ちはなく、時間のムダ・労力のムダを徹底的に嫌う厳しい経営者としての背中を従業員に示し続けた。「神内社長は怖い人」と溢す従業員もいたが、それは給与や立場だけでなく、考え方や

姿勢といった『無形の財産』を身に付けさせようという権重郎の優しさでもあった。

また、新しい知識・技術への興味関心も人一倍で、アメリカとの往来が自由になると、同業の経営者を引き連れて現地視察を行うなど圧倒的な行動力を見せた。海外で仕入れた知識をもとにホイストクレーンの製作を開始したのが1953（昭和28）年のことで、以降、今日まで一貫して搬送機器の研究開発に取り組み飛躍を続け、高精度・高機能な製品を提供することで数多くの企業のものづくりを支え続けている。

見えずとも受け継がれゆく魂

権 重郎は1968（昭和43）年4月、65歳の時に中小企業関係の産業功労者として最高の荣誉である黄綬褒章を受章した。体調を崩し入院していた権重郎だったが、無理を押して東京での伝達式に出席した。「これでもう、いつ死んでも悔いはない」と声を詰まらせながら言う権重郎の脳裏には、これまでの悲喜交々が思い出されていた。

伝達式を終え、すぐさま病院に戻った権重郎だったが、同年夏からは、病状は悪化の一途を辿った。その頃から、権重郎はよく故郷である綾部のことを気に掛けるようになった。「あの町に何か変わったことはあったか?」、「あそこの工場は調子どうや?」などと、よく尋ねたという。父親との決別以降、ついで実家には帰らなかった権重郎だったが、生まれた町、ひいては生家への郷愁が心のどこかに残っていたのかも知れない。

1969（昭和44）年1月、神内権重郎は病床にて、その生涯に幕を下ろした。不遇な幼少期を過ごしながらも、その環境に腐ることなく、自らの意志で単身大阪へ飛び出し、数々の荒波に揉まれながらも会社に身を賭してきた男の信念は、目に見えぬ財産となって今でも神内電機の中で経営の指針として受け継がれ続けている。



常に「まごころ」を胸に

「まごころ」とはいつわりのない心。その意味を会社・全従業員と共有して、社会に貢献できる優れた製品をこれからも供給していく。